うとない

Vol.434 2024.7

相談支援事業所とまっぷ
10年を迎えて

2014年7月に開所した相談支援事業所とまっぷが今年で10年を迎えたのを機に、これまでの経過やとまっぷの特徴・苫小牧市内の動向について、本年新たに管理者となった本間謙一さんにまとめてもらいました。

表　障がい福祉サービス事業者数（苫小牧市）

種　　類	2014年7月	2024年6月
相談支援事業所	6	14
居宅介護	33	42
短期入所	7	9
生活介護	14	19
入所施設	8	8
就労移行支援	5	1
就労継続支援A型	3	3
就労継続支援B型	14	28
宿泊型自立訓練	2	2
共同生活援助	8	45

相談支援事業所とまっぷは、今年７月で満10年を迎えました。この10年間で、約300人以上の利用者の方々と出会い、ご家族や関係機関の皆様とも連携させていただき、多大なるご支援、ご協力をいただきました。この場を借りて、心より感謝を申し上げます。

＜相談支援事業所の概要＞

相談支援事業所は、障がいを抱える方や家族からの日常生活や社会生活に関する相談に応じると共に、障がい福祉サービスを申請する際に必要となる「サービス等利用計画」を作成し、サービスを利用後も計画に沿ったサービスが利用者にとって効果的に提供されているかを定期的に評価します。当事業所の相談支援専門員がケアマネージャーとしての役割を果たし、利用者の希望やニーズに基づいて計画を作成します。この計画には、ヘルパーや就労訓練など、各事業所が提供する障がい福祉サービスのみならず、家族、近隣住民、地域社会、NPO、ボランティアなどが行う支援も含まれます。「サービス等利用計画」は2015年4月から障がい福祉サービスを利用するために、相談支援事業所や自身で立てること（セルフプラン）が必須となりました。この要請に応えるとともに、地域社会のニーズを満たし、長期入院している方の退院後支援を充実させるため、2014年7月に苫小牧市で6番目の相談支援事業所として当事業所が開設されました。

＜当事業所の特徴＞

当事業所は、２名の相談支援専門員によって運営しています。ウトナイ病院を母体としており、相談支援専門員が精神保健福祉士の資格を持っているため、精神障がいや知的障がいを抱える方への支援に特化しています。さらに、市内には14か所の相談支援事業所がありますが、その中で当事業所は苫小牧市東部に位置するため、苫小牧市のみならず東胆振地域にお住まいの方から依頼を受けることがあります。

＜苫小牧市における障がい福祉サービスの動向＞

この10年間で法律改正や報酬改定が行われ、障がい福祉サービスに大きな変化がありました。全国と同様に、苫小牧市においても障がい福祉サービスを提供する事業所の数が増加し、特に就労継続支援B型や共同生活援助の事業所が増加しています（右上の表参照）。就労継続支援B型は比較的簡単な作業を通じて安定した就労が可能で、より柔軟で参加しやすい支援を行っています。また、共同生活援助は利用者がグループホームで食事の提供や金銭管理など生活する上で大切な支援を受けることで、安心して地域生活を営むことができるサービスです。これらのサービスの増加により、様々な支援が必要な方々が地域で生活し、多様な働き方を通じて収入や生きがいを得る機会を増やしています。

＜結びに＞

これまでの10年間で築いた信頼と経験を礎に、私たちは引き続き障がいを抱える方が地域社会で自立し、充実した生活を送るための支援を進化させ、希望や目標に向かって進めるよう、地域と連携してサポートを続けて参ります。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

部署紹介

第３回　Alcole Rehabilitation Program担当スタッフ

当院は約20年以上に渡ってAL（アルコール）依存症の患者さんを対象としたARP（アルコール・リハビリテーション・プログラム）という治療プログラムを実施してきた。現在は３～５名ほどのAL依存症患者さんが入院しており、主に、2階・3階病棟のAL担当スタッフが中心となって関わっている。

AL担当スタッフは、2階・3階病棟の看護師だけではなく医師・作業療法士・精神保健福祉士・管理栄養士・デイケアスタッフといった様々な職種のスタッフで構成されている。月に1回「AL担当スタッフ連絡会議」という会議を行い、ARPの運営についてや入院患者さんの情報共有、勉強会や研修についての案内・報告等を行っている。

こうした取り組みを通して、入院・外来という枠を超えてデイケアで行われているプログラムにAL担当スタッフが進行役として協力する体制を取り、入院中・退院後に関わらず継続的な関りを持てるようにしている。さらに、当院のARPに協力していただいている回復施設「札幌マック」が毎年夏に実施しているキャンプにも毎年数名のスタッフが参加し、入所支援を経て退院した患者さんの話を聞いて様子を知る機会を持つ活動も行っている。1年ぶりにスタッフと会った時、とても嬉しそうに話をしているかつての患者さんを見ていると、継続的な関わりが患者理解をすすめ信頼関係をさらに構築しているのだと実感している。

現在は、AL担当スタッフだけでなく、病棟スタッフがARPにも出席することで、AL依存症に対する知識と理解を深めてより専門的な関わりが出来るようスタッフの育成にも取り組んでいる。そのAL担当スタッフの一人である山田歩斗看護師が先日の日本アルコール看護研究会東京大会で最優秀賞である会長賞を受賞した。「痛みの果てにある依存～依存は患者さんの生命線である～」という演題で、数々の嘘で周りを振り回したブロン依存の入院患者さんとの関りを振り返る内容。「依存は、患者さんの抱える『痛み』に対処する方法であり生きるための生命線であった。患者さんの起こす問題ばかりに目を向けるのではなく、患者さんの抱えている『痛み』に目を向けて向き合っていきたい」と熱く語ってくれた。

Dr.望月の日々雑感

アルツハさんの独り言①

医療法人こぶしの知られざる歴史を紐解いてみる。

1986年2月に植苗病院は開院したが、金がないので、医者はアルバイトで生活費を賄った。冨田先生と私は市内の急病センターに週１回行き、それを生活費としていた。緒方さんは金持ちだったのか、アルバイトもせずに暮らしていた。スタッフには無給と言うわけにいかなかったから、高くはないが、それなりの給料を払っていた。幸いと言うか私の時に、死にそうな人や、大けがをしてくる人はセンターにはこなかった。外科当番があったんだと今にして分かったが、外科当番がないと何人殺したのか、恐ろしくなってくる。植苗は貧乏で当直料は払えず、3人で回すので、月10日は植苗の当直があり、計算すると一月のうち２週間は帰宅できないことになる。今ならとても耐えられなかっただろうと思われる。

次は大学の同級生に頼まれ、九州から来ていただいた先生。統合失調症を長く患っており、病気だと分かってはいたが、医師の一人として登録できたのはありがたかったが、病院内では医局と食堂しか行くところがなく、時ににやにやと笑い、会話は成立せず医局の雰囲気が激変したことがあった。書類上の医師一人減るのは痛手だったが、先生もいづらかったのか、友人と相談し、数か月で引き取ってもらった。次は病気ではないが、世間の常識とかけ離れた先生。マイペースで他人の言うことは全く聞かず好き勝手に行動する。長くは続かないと思っていたら、幸い自らやめると言っていただきほっとしたこともあった。もちろん今の医局にはそんな方はいらっしゃらないので安心してください。幸いというかこれまでの先生方は優秀な方が多く感謝しています。（次号に続く）

精神科医　田中　尚朗

第16回　駅探訪・ボストン北駅

みなさんこんにちは。今回からは、これまでに私が訪ねた駅について紹介していきたいと思います。初回はボストン北駅について見てみましょう。

ボストンには北駅と南駅があり、その2つの間には旅客列車はないけれども、かろうじて線路がつながっているいう話は、以前の記事でも取り上げました(第4回、第14回)。この北駅を最初に建てたのは、ボストン・アンド・ローウェル鉄道(第10回)で、1835年のことです。その後、各社が近辺にそれぞれの駅を設置するという事態となり、これらを1か所に集めるためにユニオン駅が1893年に建てられました。これが現在に至る北駅の原型となります。

20世紀後半、鉄道各社が崩壊していく中で、ボストンエリアの公共交通を担うMBTAが北駅と一部路線を引き継ぎ、1985年に駅は建て替えられました。それも老朽化が進み、2019年に新駅がオープンしています。北駅の建物は、TDガーデンと呼ばれる屋内競技場と一体化しており、NBA(バスケットボール)のセルティクスとNHL(アイスホッケー)のブルイーンスの本拠地として有名です。今シーズンはセルティクスが全米制覇したため、駅前の通りでパレードが行われました。

現在の北駅からは5路線のコミューターレールがMBTAにより運行されています。かつて覇を競いあったボストン・アンド・ローウェル、ボストン・アンド・メイン、イースタン(第9回)の路線の一部も、MBTAに引き継がれて生き延びています。また、米国内で長距離列車を運行しているアムトラックにより、国内最北のメイン州へ向かうダウンイースター号が運行されています。

北駅は、州内を流れるチャールズ川の河口に近く、列車はまずこの広大な川にかかる鉄橋を渡ります。この鉄橋、実は可動橋で、今でも川に船を通すために、橋が中央から観音開きになっているのを見ることがあります。陸運と海運の交錯というのも興味深いものです。

最近、栗原康さんが書いた『超人ナイチンゲール』（医学書院）という本を読んだ。ナイチンゲールかっこいい…そう思った。

現在、クリミア半島はロシアによるウクライナへの軍事侵攻で再び注目を集めているが、170年前のクリミア戦争の最中、ナイチンゲールは傷病兵へ近代的看護を施し、「クリミアの天使」と呼ばれた。しかし、栗原さんの描くナイチンゲールは、社会の既成概念を打ちこわしていくまさに「ハンマーをもった天使」である。

> 野郎ども、やっちまいな……（中略）……うおお、いっぱいあるじゃねえか。つぎからつぎへと必要物資をもちさっていく。なにをやったのか。［ナイチンゲールは（引用者）］軍の物資を強奪したのだ。ヒャッハー。（本書より）

ナイチンゲールは、なかなか動かない軍と政府を強引な手法でねじ伏せていく。しかし、その目的は患者のなかにある「自己治癒力」を引き出せる医療環境を整えていくことである。環境さえ整えば死者数は激減し、治癒率は向上する…そのことを統計の数字の力で政府に突きつけていく。

私はこの本を読んで、精神科医の中井久夫の「医者が治せる患者は少ない。しかし看護できない患者はいない」（『看護のための精神医学』医学書院）という名句を思い出した。実はこれと同じことをナイチンゲールは『看護覚書き』のなかでいっている。

すごく読みやすい本なので、ぜひ手に取ってみてほしい。

（M.W）

お　知　ら　せ

◆　入院中の方へ手続きのお願い　◆

入院時食事代標準負担額の減額認定及び入院医療費の限度額適用認定、国民健康保険証、後期高齢者医療被保険者証、ひとり親・障害受給者証の有効期限が7月31日までとなっておりますので、8月中に各市町村などの窓口で手続きをしていただき、新しい認定証をウトナイ病院事務に提出していただけますようお願い致します。

ご不明な点がございましたら各市町村などの窓口又はウトナイ病院医事課までお問い合わせ下さい。

発　行
社会医療法人こぶし広報委員会
苫小牧市ウトナイ南２丁目1-8
TEL:0144-84-5561
http://www.uenae-hp.or.jp/

レプリカの三連水車

＜後記＞

先日20年以上ぶりに子供の頃過ごした町に行ってきました。町の風景の一部だった水車が立派な観光地になっていてびっくり。自分で車を運転しての訪問は初めてでしたが、何よりも北海道の恵まれた道路事情を痛感した数日間でした。　（H）

写真はご本人の了承を得てから掲載しています。
本誌は道産間伐材と道産の広葉樹を使用しています。